
異世界への迷人

Siba

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界への迷人

【Nコード】

N6614Z

【作者名】

Siba

【あらすじ】

ある日、突然異世界にいた修哉。そこは魔法が発達し、科学が未発達という場所だった。元の世界に戻るため、一緒に異世界へ行ってしまった仲間と共に修哉は行動する。

遠慮なく厳しいことをビシバシと言ってくれてかまいません。よくあるファンタジーものです。

プロローグ

夕暮れで赤く染まる空。

その下に完全武装した兵士複数人と男が2人。

一方の男は悲しみとも余裕ともとれる表情を浮かべ兵士に今にも連行されようとしている。

またもう一方は、兵士に羽交い絞めにされ身動きをとれず、ただ大声で怒鳴っている。

「お前ら！ 康一をどうするつもりだ！？」

心の底から声を絞り出す。

長く続いた『大戦』に終止符を打ったはずの康一。

彼が、仲間だと信じ共に行動してきた友軍に連れて行かれる。

果てしなく続くと思われた戦争。

その戦争を終わらせるため、康一は数人の仲間と共に（その中には俺も含まれる）敵陣深くへ突撃し、敵の大将を討った。

そのはずなのに、連行されていく。

「彼は無形軍の大将に止めをささず、封印を施し、いずれ復活させようとした疑いがかけられている。」

康一を連れて行こうとしている兵士の1人が無機質な声で言った。

そんなわけはない。俺の目の前で無形軍の大将を討ったのは、紛れもない康一だ。

自軍からも死者が大量に出た、あの乱戦のなかで、康一には封印を施す必要も、理由も、余裕もない。

そもそもそんな第一級戦犯者のようなことをしたら死罪は免れない。

「康一はそんなこと絶対にしていない。俺はずっと共に行動して

いたが、そんなそぶりは無かった。」

もう何度目かわからない反論。

「それが本当かどうかは私達が調べることに。」
「ずっとこのような調子だ。さっきから反論は全て一蹴されている。」

「待っていてくれ。すぐ戻ってくる。」

康一がつぶやくのが耳に入った。

「待つ？ 何をだ？ 康一……。お前が死ぬのを、か？

お前もあいつと同じでこんなところで死ぬのかよ。」

「そうじゃない。俺が無罪放免となるのを、だよ。」

まだ死ぬと決まったわけじゃない。それなら俺はあいつとの友情に賭ける。」

それは危険すぎる賭けだ。第一に国家権力を友情で曲げることはできないだろう。

第二に……

「俺らをこんな目に合わせたのはあいつだぞ。それなのに……。あいつとの友情にかけるのか？」

「ああ。俺は信じている。」

その声からははつきりと決意が感じられる。

「待って……。いるからな。元の世界に帰れる日を。」

「心待ちにしてな。」

会話はこれで終わった。いや終わらされた。

康一が兵士に連れて行かれたのだ。

もう後は信じるしか無い。

康一が戻ってくるように。また笑い会える日が来ると。

狂ったように俺は祈り続けた。賭けの勝率が少なすぎる。俺はすでに1人失っている。

これ以上何かを失おうものなら、頭がおかしくなるかもしれない。

「頼むから、生きて帰ってきてくれ……。」

小さな呟きを幾度、漏らしたことが。

言っただけ願いがかなうなら……と幾度、願ったことが。

数日後。

城下に配られた新聞。

そこには、大戦終結の4文字と、
……戦犯処刑の4文字。

望みは砕かれた。

俺にはなにが残っているんだ？

あいつを死なせ、今また康一を失った。

誰が原因……？

誰のせい……？

誰が悪い……？

……あいつだ。

俺はあいつを絶対に許さない。

俺は絶対に復讐を成す。

そのためにこの手が人間の血で汚れても……。

異世界転移

一面の緑。

「空が見える……。」

地面に仰向けに倒れ、空を見上げている自分がいた。

つい先ほどまで俺（真島修哉）は白い壁で囲まれた教室で退屈な授業を受けつつ、窓外の桜を見ていた。

桜前線が5月頃通過する北海道は、5月病でやる気のない時期と同時期のため、授業中、桜を見て暇をつぶすことができる。

それが一変、今は森の中にいる。

何故か？そんなことはわからない。

わかっているのは、自分が今、どこにいるのかわからないということだけ。

目を覚ましたらここにいた。

もしかしたら夢か……？

もしそうだとしたら異様にリアルな夢だ。

夢って靄がかかって細部まではわからないものだと思っていた……。

木々のざわめき。鳥と虫の鳴き声。視界の中心が空。その周りに一面の木々。前に家族で、キャンプに出かけた時に見たような光景。ただ、キャンプ場と違い、人のざわつきは聞こえない。

それに北海道の風の肌寒さと違い、この森に吹く風はとても温かい。気持ちいい。

やばい。眠ってしまおう。

でも睡魔に身を任せ寝ている内にこの夢が覚めるかもしれない。
でも夢の中で寝るってどういうことだ？

しばし悩んだ後、

それはそれでいいだろう。という結論に達し眠ることに決定。
空を見ていた目を閉じ、睡魔に身を任せて・・・

眠ろうとした時、

「起つきろー！ー！」

声と共に鳩尾にゴスツツという衝撃。腹部がシェイクされる。

脊髄反射で手が腹部を覆う。食後だったら一体どうなっていたこと
やら・・・。

「って殺す気かつ！」

体を飛び起こし衝撃の主を睨む。

その姿を見たたとんに、俺は・・・
・・・不覚にも見とれてしまった。

「いいじゃない。人間、それくらいじゃ死なないわよ。」

声の主は、女性だった。いや少女というほうが正しいかもしれない。
い。

満面の笑みでこっちを見ている。

年は俺と同じくらいか。俺と同じ制服をきている。背は女子としては平均で。絵に描かれているかのように整った顔。肩より若干長い金色に輝く髪。世の中の汚れを全く知らないと言わんばかりに輝いている瞳。肌は雪のように白く艶があり、ところどころピンクに色付いている。

正直、とてもかわいい。

そして・・・腕を僕の腹の上に突き立てていたらしい。

「……とうとう俺は、『森で美少女に会う。しかも2人きり。』というびっくりイベントを体験してしまったのか。直後、それが夢であることに気付き、一気に嬉しさが萎む。しかし今は、そんなこと考えていられる場合ではない。首を振り煩惱を追い払う。」

「死ななくても相当痛いんだよ！」

煩惱消滅と共に鳩尾の痛みが戻ってくる。

正直かなり痛い。

ん？ 何かがおかしい。少し考えてみよう。

これは夢のはずだ。

ならなぜ……なぜ腹部への衝撃と痛みが……？

そこから導き出せる結論。

「夢じゃないのか……？」

「なに言ってるの？ 痛いあとに夢じゃないってどんな思考回路してるのよ。」

金髪美少女が罵倒してくる。

「いったいこいつ何なんだ。名前も知らない女に鳩尾殴られたのなんて初めてだぞ。」

「あの、すみません。出会って早々、倒れている他人の鳩尾を殴ったあなたは誰ですか？」

嫌味たっぷりで尋ねる。

「え？ あたしは綾よ。まさか知らなかった？ ついでにあんたの名前は？」

嫌味効果なし……。

それにしても綾ってどっかで聞いたことあるような気が……？
！ 確かクラスのやつが言っていたな。

清水綾……成績優秀、温厚、優しい、かわいい……つまりパーフェクト。

絶対違うな。名前が同じでかわいいところしか一致しねえ。

いや、成績はしらないけど……

そんな別人のことは置いておいて何でこいつの『名前を知っているか』に『まさか』がつくのか、とか、俺の名前はついでかよ、とか言いたいことは沢山あるが名前を聞いた以上こっちも名のらなければならぬ。

「俺は真島修哉だ。ついでにお前のことは知らない。」

「はあ？ あたしの名前知らないなんて状況分析できないんじゃないの？」

出会って5分。険悪な関係の完成。

「俺が知ってるの綾って人間は、クラスの人間が話していた優しいとか温厚とかがつくような人だけだ。決して出会って早々鳩尾を殴ってくるやつじゃない。」

「あ、それぞれ。それがあたし。」

「はい？」

返しが想定外すぎる。

え？何？この人が例の完璧人間？

「学校って一度変な噂流れたら止まらないじゃない。だからそういうふりをしてたのよ。優しい、温厚、とかね。」

「じゃあ、今は？」

「猫かぶっていません。」

あ、なんか俺、人間不信になるかも。今まで顔は見たことないけど同じ学年に性格最高、姿も最高という人間がいると思ってたのに・

・・・

それが一転。

天は二物を与えず、か・・・。そのとおりじゃないか。

「どうしたの？何か魂の抜けた顔になっているわよ。」

「ちよつと人間不信になりそうだな。」

「なんで!？」

「とりあえず、俺らがどんな状況にいるか整理してみよう。

清水・・・でいいのか？」

ここはどこだかわかるか？」

地面に折れた枝で絵を書いている清水に尋ねてみると・・・

「知らない。」

即答。

「なぜ、俺らがここにいいのかわかるか？」

「知らない。」

即答。

「時計はあるか？ 時間は？」

「知らない。」

即答。

「好きな食べ物は何？」

「知らない。」

即答……。

「って清水！ 俺の話聞いてないだろ！」

自分もわからないことを他人に聞くのもどうかと思うが……。

「知らない。」

「音声再生機か！」

「うわっ びつくりした。なによいきなり。」

やっと別の反応をしてくれた。

「いや、なによ、は俺のせりふだと思うんだが。話聞いてたか？」

「ええ。聞いてたわよ。」

「どんな話してた？」

「えーっと、あれよ。地底人がいるかどうかって話。」

「全然ちげえよ！」

やばい、この見知らぬ土地でこいつと2人きりって異様なほど不安だ。

「頼む、学校の時みたいに猫かぶっててくれないか？」

まさかこんな願いを他人に言うとは思ってなかった。

むしろそっちのほうが一緒にいて安心できる。

「めんどくさい。疲れる。だるい。嫌だ。ことわ……」

「わかった。もういい。」

永遠に続きそうな断り文句を切り上げる。

その後また暫く話し、（案の定全然進まなかった。）認めたくないまとめを言ってみる

「つまり、俺らはなぜここにいるか全くわからない。

なぜきたのかもわからない。

ここがどこかもわからない。でいいか？」

「何にもわかってないじゃない。」

全く持ってそのとおり。

「反論が見つかりません。」

「よろしい。」

会話が進まない。

「なぜ、清水はえらそうなんだ？」

「なんとなく。」

疲れた。こいつと会話をするのは本当に疲れる。

顔とスタイルはいいのに・・・もったいない。

まじまじと顔を見ると、

「なにこつちをじろじろ見てるのよ。気持ち悪い。」

全くだ。

「いや、なんでもない。」

「言わなきゃ痛い目見るわよ。」

言っても痛い目見るんだろう。どうしようか。

「あ、見てみてー。こんなところに手ごろな木の枝が・・・。」

長さ50?程の木の枝。

清水はそれを拾い右手で持ち、自分の左手のひらに打ちつけている。打ち心地を確かめているのだろうか？

パシッ、パシッ、乾燥している木からいい音が聞こえる。

怖い・・・。この上なく怖い・・・。

よし、ここで一つ考えてみよう。

選択肢は2つ。

1つ、言わない。木の枝の餌食。

2つ、「顔とスタイルはいいのにもつたいたいと思っていました。」と正直に言う。木の枝の餌食。

穩便にすませる方法が見当たらない！

というより、どの選択肢でも変わらないのかよ。なら、ここはだめもとで2つ目の選択肢だ。

「顔とスタイルはいいのに性格が悪いからもつたいたいと思っ
ていました！」

「そこに座れ。」

失敗だ。余計に怒らせてしまった。

「すいませんでした。」

正座の状態から手をつき、地面まで頭を下げる。土下座だ。

この際、プライドよりも命のほうが大事である。

神様、俺をお助けください。

数秒後、頭を上げるとそこには・・・

木を手で持ち、その手を振り上げている清水がいた。

その手が

俺の頭にせまってくる・・・。

俺は咄嗟に横に転がった。

すると、さつきまで俺がいた地面を木の枝が通過してえぐれる。

木は折れていない。

いつもなら頑丈な木だ。と褒めていたかもしれないが、状況が状況。そんな暇は無い。

俺は起き上がり、
全力で、
逃げた。

一体どれだけ森の中を逃げただろうか。
ずっと帰宅部だったため体力はあるとはいえない。
でも女子に負けることは無いだろうと思っていた。
今日までは。

足の限界。走るのをやめる。
ずっと制服だったため全身あせただ。息もあがっている。
「疲れた……。さすがのあいつもここまで追ってこないだろう。」

その場に座り込み、息が整うのを待つ。
しまった。どう走ったかわからない。
落ち着くことでやっと気付いた事実。

冷静になって考えてみるとここでの唯一の話し相手であるはずの清水とも別れた。
これは精神的にも結構やばいんじゃないか。という考えが浮かぶ。
うーん。これが大切な物は失ってからその大切さに気付くというやつか。

大切な物 話し相手・人間だ。そう考えていると無性に会いたくなってくる。
その時、

「あんた最低ね。こんな森の中に女の子を置いて1人逃げるなんて。」
「俺が走ってきた方向から清水が現れた。右手の枝は健在。目から怒りが感じられる。前言撤回。会いたくなかった。」

そもそも逃げる原因を作ったのはお前じゃないか。という反論はおいといて、

「どうやって追いついてきたんだ・・・？」

「は？普通に走ってただけど。」

「普通って、俺、男子でもうすでに疲れているんだが。」

「体力ないわねー。私はまだまだ全然平気よ。」

俺、全然平気じゃありません。

それどころか体力女子以下って結構ショック受けてるんだけど・・・
。そつえば成績優秀ってことは体育もできることになるのか。

「いけない。忘れるとこだったわ。あんたさっきのこと忘れてないでしょうね。」

俺は覚えているが、清水には忘れておいてほしかった。

「イエナンノコトダカサツパリ。」

「覚えているわよね。」

やばい。笑ってる。この人笑ってるよ。笑っているのに怖いよ。

「覚えて・・・ま・・・す・・・。」

脅迫に敗北。学校での顔は一体なんなんだ。

「よろしい。じゃあ覚悟してね。」

もう抵抗しても無駄だろう。それどころか体力はむこうのほうが上。

どう考えても俺に勝ちめは無い。
一体どうしてこうなったんだ？
俺は授業を受けていただけなのに。
数分前まではまったく知らなかった美少女に枝で殴られようとして
いる。

清水が枝を振り上げる。本日2回目だ。

ヒュンという音と共に振り下ろされる枝。それが俺の頭に当たる。
バキツという木の折れる音と、爆発音が俺の頭の中に響く。

「は？ 爆発？」

殴られた痛みよりもそつちのほうに気になる。

「いつてみましょう。」

清水が折れた枝を捨て呟く。

「爆発音のした方向にか？」

「ええ。工事とかなら人がいるはず。まずはその人に聞いてみま
しょう。」

「お前にしては正論じゃないか。」

「それはあたしに対する悪口ととっていい？」

「だめです。」

会話はこれで途切れ、俺ら2人は歩く。

爆発音のした方向へと。

異世界の理

爆発音の方へ走る。

工事でもしていてくれるとありがたかった。この際、爆破実験でもいい。

修哉と綾がその場所に到着したとき、信じられないことが起こっていた。

そこにいたのは武装した軍隊。歩兵、弓兵、種類は様々。それと・・・。

「なに・・・あ・・・れ・・・？」

綾が正面から見て左にいる軍隊と別の方向をさす。どうやら俺とは別のほうを見ていたらしい。その指の先にあったものは・・・。

人型とっていいのだろうか。全ての固体の身長は2m前後。全身がナスのように黒っぽい紫をしている。そして全身に、まるで、血管のように青い線が張り巡らされている。異様なのは色だけではない。遠目でもわかる。基礎は人型なのだろう。だが体のあちこちから、何か棘のようなものが突き出している。バラの棘のような形。しかし大きくて、禍々しい。肩の物もあれば、足、額、首、いたるところから棘が出ている。またそれらの棘も黒く、青い筋で彩られている。

一目でわかった。

「ここ地球じゃないじゃん……。」

少なくとも俺の住んでいた地球にこのような生物はいない。

いたとしても軍隊が出動しているくらいだ。そこまでの危険生物がいたら嫌でも耳に入ってくる。

軍隊と謎の生物。2者が目の前で戦闘を繰り広げている。

人は剣、槍、弓といった道具で戦っているが、謎の生物は違った。

彼らは軍隊の人間を踏み潰し、引き裂き、噛み砕いていた。

赤い噴水がいたるところで鮮血を吹き、それはここからでもわかる。それともう一つ、青い噴水も水を噴いていた。

「ここは地球じゃないの……？」

「わからない。」

わかるわけがない。

何？異世界へワープ？そんなことができないことなど、小学校ですでに知っている。

しかし、現に俺らは地球では無いところにいる。

それは紛れもない事実。痛みを伴うため、決して夢では無い。

「ははっ。なんだよこれ。ビックリならもう成功だ……。」

あまりに頭が混乱して的外れな台詞しか出てこない。

さっきまでの俺たちは日本かどうかはわからないにしろ、地球にいると思っていた。

なのに……目の前の現実。それが俺らの推測全てを否定していた。

「あなた達、ここで何をしているんですか？」

呆然としていた俺らに、押し殺された声がかげられる。

「聞いていますか？危険ですよ。」
「そこまで言われてはつと我に返る。」

振り返るとそこには人が一人立っていた。
性別は女性。身長は小柄で135？前後。また幼さの残ったかわいい顔立ち。真紅の髪を後ろでまとめ、ポニーテイルにしている。夕暮時の太陽のような瞳をもち、色は日本人に似て肌色。服はRPGでみたような赤いローブを纏っている。手には彼女の身長を超えるほどの長い棒の先端に赤い宝石を加工したと思われる珠玉を冠した杖を持っていた。
ようするに全身赤の幼女がいた。清水と同等の可愛さだ。
この子は暴力キャラには到底見えない。

「きみー、こんなところにいたら危ないよー。」
横で清水が猫なで声で話している。
おいなんだその声。なんだその台詞。さっきまでの混乱も感じられない。

『おい、清水、初対面の人に対してちょっとなれなれしくないか？』
『いいのよ、かわいい子だから。』
基準がわからん。

なぜかわいくなれなれしくなるんだ。
まあ、清水の考えがわからないのは、前の会話で立証済みだ。わざ

わざわざこむ必要もないだろう。

「おかしなことをいいますね。危ないのはあなた達のほうですよ。」「
幼女が首をかしげて言う。

「どういうことだ？」

「説明している暇はありません。すこし伏せていてくれませんか？」
とりあえずこの世界のことはこの世界の人に任せようと思い、俺は
横にいる清水を説得。

むこうはむこうで『なんで伏せなきゃいけないのよ。』とか言っ
てきたがまあ、説得できたので気にしないでおく。

俺らが伏せたのを確認した幼女は、目を閉じ、

歌った。

それは、とても綺麗な歌声だった。

またその声は発せられると共に風に溶け歌詞がよく聞こえない。
ずっと聞いていたら眠ってしまいそんなそんな歌声だった。

どれくらい聞いていたのだろうか。時がたつのも忘れ、聞き入って
いたらしい。

彼女は歌い終わり、目を開けた。

そして謎の生物の方向を向き、杖を振る。

瞬間、謎の生物のいた中央付近の地面が、爆発した。

黒い固体が空中を舞う。

「……………」
「……………」

謎の生物が空中に飛ぶと共に、俺と清水が動けないでいる。

爆発音の正体はこんなにも理解不能なものだったのか。

「爆発音……。何をしたんだ？」

「火属性の高位魔法を使用しただけです。」

もうわけがわからない。

え？

魔法？

属性？

はたから見ると杖振って爆弾を爆発させたようなものなのに。

「そもそも魔法ってなんなんだ？」

「ええ！？魔法を知らないなんてどこの田舎物ですか？」

そこまで驚くことなのだろうか。

「はたから見ると、爆弾を爆発させたように見えるんだが。」

「爆弾？」

話がかみ合っていない。

爆弾のことくらい小学校低学年。いやもっと前くらいから知ってそうなものなのに。

「まあ、爆弾はおいといて、やっぱり魔法ってあれか？空飛んだり、瞬間移動したり。するやつ？」

「そんな便利な魔法があったらいいんですけどね。」

残念ながら魔法は回復と攻撃の2種しかありません。まだ補助魔法は無理なんです。

唯一持ち上げるということはできますが。」

そうなのか。魔法ってそこまで便利ってわけでもないんだな。

いや、相当便利か。あんなわけもわからない生き物と戦ってるくらいだし。

ふと横に目をやると清水がいまだにフリーズしている。肩を叩いて現実世界に呼び戻す。その途端、さっきの俺と同じ質問を幼女に対して聞いていた。

「2人ともここは危ないですから、本陣へ来ませんか？」

「本陣って・・・あの軍隊の大将がいるところか？」

「ええ、この場合大将ではなく国王様が直々に指揮をとっていますけどね。」

国王自ら出陣って謎の生物はどれだけ強いんだよ・・・。

「いこ。あんたも来るわよね？」

「ここに残っても流れ弾で死ぬか、あの謎の生物に殺されるかしそっうだしな。行くよ。」

あ、そういえば大切なことを聞き忘れていた。

「名前はなんていうんだ？俺は真島修哉、こっちは清水綾だ。」

幼女に尋ねる

「私の名前は、フロトと申します。フロト・アヴェラス。」

フロトつとよし覚え・・・

「よく間違われますが、私は今年で16歳です。では案内いたします。」

「「え？」」

「リピートプリーズ。」

なんか今とんでもないことを言ってたような・・・。

「案内いたします。」

「もう少し前。」

「16歳です。」

「本当に？」

「皆さん、そういいいます。私は16歳に見えないって・・・。」

この身長と見た目で16歳？
半分くらいかと思っていた。

それよりも俺らと同じ年ってところに一番驚く。

「ごめんな。もう少し幼いと思ってたんだ。」

泣きそうなのでフォローをいれるが、言うてから気付く。

これ逆効果なんじゃね？

「そうですね。グスツ、どうせ私は小さいですよ。」
本格的に泣き出してしまった。

横で清水が「あんたさいてー」という顔でこっちを見ている。

『悪かった。本当に悪かった。』と何度言っても涙は止まってくれない。

それにしてもないてる時可愛かったよな！。

俺の中のSが目覚めてしまつかも。

フロトに案内をしてもらい、本陣へ向かう途中、俺らはいろいろなことをフロトに尋ね、覚えた。

まずこの世界だが、サンテリウスというらしい。

見つかっている大陸はここだけ。というより海をわたる技術がないそうだ。

よってここはサンテリウス大陸とよばれている。

身分を持つのはほんの一握りの人間だけで、他は全員平民。

次に魔法についてだが・・・聞いたところ、

才能のある人間にしか使えない。才能には魔法そのものの才能という概念はなく、各属性への適正は個人で異なるという。雷は使えるのに、炎は全く使えない。そういったものだ。

また魔法には精神力（＝生命力）を多量に要し、使いすぎるとしに至ることもある。威力は高いがリスクも高い、諸刃の剣だ。

また精神力は時間経過と共に回復する。

魔法＝技術であるため魔法を使える人間にはさまざまな権限が与えられているという。

攻撃魔法は、自然に存在するあらゆるエネルギーを力に変換させているらしい。

回復魔法は傷を瞬時に癒すのではなく、長い時間をかけて徐々に傷を癒していくものである。しかし魔法に必要な精神力の問題もあり、最近では薬を使うこともあるとか。

科学は全く発達していなく、そのため移動手段も限られる。

重い荷物は魔法使いが何日もかけて運ぶらしい。

魔法に詠唱はいらない。集中するために歌う程度。

以上が知ることのできたことである。

いろいろあったが案内をしてもらい本陣に到着。

「でっけー。」

石を積み上げて作った壁の内側に、これまた石で作られた城。豪華さは全く感じられないが、守りには適していそうだ。ずっとテントのようなものが並んでいるところと考えていた俺は馬鹿だ。と痛感する。

最深部の部屋に到着。

「ここで少し待っていてください。」

「ああ。」

軽い返事。

「呼んだら入ってきてください。」

と忠告をしてフロトはドアの中に入ってしまった。

「なあ、清水。」

「何？」

「俺ら、どうなると思う。」

「知らない。」

「だよなあ。わかるわけない。情報が少なすぎる。」

そもそもこの地の世界観もいまだにわからない。

わかっているのは魔法の使用が可能なことと、謎の生物の存在。それに関連して軍隊の存在。

情報ととっていいのかわからないが

フロトという少女。

「地球にもどれるのか。」

今まで心の中で思っていたことを口に出してみる。

「……………」

清水はうつむいて何も喋らない。

人生、どこでどういつぶりに転ぶかわからない。
ふとその言葉が脳裏をよぎる。

地球の・・・日本にいるうちは少なくとも安全だった。
目の前で戦争を見た今となってはどうだ。しかも謎の生物までいる。
この先、安全の保証は一切ない。

俺らはなぜ、この世界にいたか。
それすらわからない。

ただこの先が不安で、不安でたまらなかった。

「入ってきてください。」

ドアが開きフロートの声が会話のない廊下に響く。

それが全てのスタート地点。
物語のスタート地点。

形持たぬ者

「入ってきてください。」
フロトに呼ばれその部屋に入ると、見たことも無いような光景が広がっていた。

壁は外から見たものと同じ色の石で作られている。

ドアの入り口から一番遠くの椅子にまで届くほど長い絨毯。その下に明かりを反射して光るまで磨き上げられた床。

その絨毯の両脇に鏡、ローブ、俺らでも着るような布服をきた人間が、縦一列にブラツと並んでいる。その人達の目が俺らを捕らえて離さない。

中学校の卒業式なんかよりはるかに沢山の目がこちらを見ている。言葉が発つせられないことが、より一層、迫力に磨きをかけている。何か怪しいことをしようものならすぐ殺されそうだ。

「国王様、この者達がさきほど説明した者でございます。」
フロトはその視線を一切気にせず、一番奥に座っている男の前に行き、片足の膝をつき手を胸の前で合わせた。

「君らが……。」
フロトが国王と呼んだ男が（いや実際国王なんだろうが、）立ち上がり、こちらを見てくる。
髪の色が茶色。いや、少し白い。顔にも、しわがある。けっこう年をとっているようだ。

『王の御前です。無礼、無きよう。』
フロトが呟く。

これは俺らに言っているのだろう。

現に俺らは王の前で、礼儀も何も無くただ突っ立っていただけだから。

『フロトと同じような姿勢になつて。』

『はあ？なんであたしがそんなこと……』

『この場所が一番偉い人だろ。』

『それは、まあそうだけど……』

『いいよ。やりたくないなら』

清水と小声で短い会話をしてから俺はフロトを真似る。

『ああ、もうやればいいんでしょ！』

納得したのだろうか。それとも俺とフロトがそうしているから、やらざるを得なくなったのか。

どちらにせよ、突っ立ったままではないのでよしとしよう。

ほんの少しの間の沈黙。

最初に口を開いたのは国王だった。

「まず一つ。君らに言いたい。……すまなかった。」

え？

なんで王様が謝ってるの？

俺と清水はなんかやられたの？

横を見ると、清水も首をかしげている。

俺同様、なんのことかわからないらしい。

「えっと、なんのこと？」

間違った。何のことでしょうか？」

敬語、敬語、自分に言い聞かせる。

「？ そなたらあそこにあつた村の住民ではないのか？」

「いえ。」

「じゃあ、旅人か何かか？」

「いえ。」

話がかみ合っていない

この世界に来てから、こういうことが多いな。」

「それよりもまずは、なぜ謝られたのか知りたいです。」

「ああ、そうだったな。」

あそこには村があつた。小さな、小さな村だ。

だが、北で『形持たぬ者』が現れてな。

そいつらはまず周辺の村を襲つた。

都市も襲つた。

わしは国を治めるものとしてこれ以上、被害を出すわけにはいけなかつた。

よつて、軍隊を編成し、討伐を始めた。

しかし、彼らの力は強力だった。わが軍は徐々に後退を続けた。

そこで最終防衛ラインとなつたのがあそこだ。

わしはそこにいた村民を都市に家を与え引越しを促した。

大半のものがそれに従つた。

村民の全てが非難した時、

旅人も、

商人も、

誰も危険な目に会わぬようこの区域への立ち入りを禁止した。

わしはフロトから君らが森にいたと聞き、
もしかしたら逃げ遅れたか。と思ったんだ。

よって謝った。

わしの力及ばぬゆえに君らを危険な目に合わせてしまったんじゃないかと思っただから。

王の話はそこで途切れた。

王は俺らを危ない目にあわせてしまったと思っ込んでいる。

俺らが、立ち入り禁止区域にいたのは、この人のせいではない。

俺らは違う世界から来たのだ。

その到着点がたまたまあそこだったというだけ。
しかし、立ち入り禁止区域に人がいても、そのような発想はまず浮かばない。

「王様、それは違います。私達は気付いたらあそこにいたんです。俺がどう説明すればいいのか迷っていることを清水が説明をしてくれた。」

だが、そんなこと言っても誰も信じてはくれないだろう。
むしろ馬鹿じゃねえの？と思われくらいだ。

考えてもみてほしい。

自分の目の前にいきなり、私異世界からきました！。って言う人が現れたでしょう。

はたして、それを信じるのは何人か・・・。
100人いても1人信じる人がいるかいらないか。
いたとしたら、その人は詐欺に要注意だ。

昨日までの俺なら絶対に信じない。
見てみる。

王様も首をかしげて、どういふことだ？っていう顔してるぞ。

「だから、違う世界からきたんです。」

これ以上、場を余計に混乱させること言わないで・・・。
フォーローが見当たらない。

仮に嘘でもいいからリアリティのある説明をしようとするど、
あの森に住んでました。

王様がさつきみたいに謝る。
間違って入りました。俺らが悪者みたいになる。

真実はどちらも悪くないが、信じてもらえない。

嘘は信じてもらえるが双方どちらかが悪いということになる。

「よし、君らの話。信じよう。」

信じちゃった。王様が長い考察の上で信じちゃった。

ここ数行の俺の考えたこと全部無駄じゃないか・・・。

「フロト。この者達の世話をフォーゲルとしてくれ。任せた。」

なんだかんだで保護者が決まってしまった。

それよりも、同じ年が保護者って・・・。

まあ、俺らはこの世界については小学生以下の知識しかもっていな

い。
保護者は必要だろう。

そういう意味では、趣味とかが合うかもしれないから良い人選だ。

それに可愛いし。

ロリコンというわけではない！フロトは同い年だ！

心の中で宣言。見た目まんま幼女なのに……。

これ口に出したらまた泣かせてしまうだろうなあ。

いや純粹に命が無くなるかもしれない。

だって魔法使いだし……。爆発させてたし……。

『命大事に』だ！

……フォーゲルって誰？

フロトに案内されて皆内の一室に辿り着く。
ここが戦時中に使う部屋のようだ。

「おかえり。」

ドアが開くなり中から声が聞こえる。

「ただいま。父さん。」

「どうやらフロトの父親らしい。」

「紹介するわ。2人は真島修哉。清水綾。」

王の指示でこの2人の面倒を見ることになったけど大丈夫？

「問題ない。家族が増えるのはいいことじゃ。」

「ありがとう。父さん。」

どうでもいいけど敬語を使わないフロトをはじめて見た。
新鮮な感じがする。

フロトは続いて俺らのほうを向き、紹介をしてくれた。

「この人が私の父、フォォーグルです。」

フォォーグルとよばれた彼は白髪の老人だった。

切れ長の目。それであって優しさを感じさせる。口角は若干上がったいて、微笑んでいるようだ

俺たちの保護者……。

優しそうな人よかった……。ほっと胸をなでおろす。

フロトの話によると、彼はフロトの育ての親らしい。

なんでも、小さい時に両親は他界してしまつたとか……。

気がつくとフォォーグルの手が目の前にあつた。

握手か……。

俺はその手に自分の手を重ねる。

「よろしく。わしはフォォーグルだ。身分は平民。現在は軍の情報整理官を務めておる。」

軽い自己紹介を終わらせてから俺らは円卓を囲んで話を始めた。

「1つ質問ですが。真島さんと清水さんは本当に異世界からやってきたんですか？」

真つ先に聞いてきたのはフロトだった。

そういえば異世界から来たっていったのは王の前が初めてだな。

「異世界から来たのは本当だ。授業を受けながら桜を見てたらここに来た。」

「あたしもそんな感じよ。桜を見てたわ。あの授業退屈なんだもん。」

授業と桜。

これは共通点か？

フロトが疑りの目でこちらを見ている。

「疑っているのか？」

「イエ。ウタガツテイマセン。」

棒読み・・・思いつき疑っているな。

まあ、信じるって言うほうが無理な相談なんだろうが・・・。服は全然違うもの着てるんだけどなあ。

俺ら制服だし・・・。

そのときポケットのごしに何かが脚に触れた。

ちよつとした重量。

ん？これは・・・。

それをポケットから取り出し全員に見せる。

「あんた、それ・・・。」

横で見っていた清水が驚いている。

直方体の物体。

「おう、紛れもない携帯電話だな。清水は持ってないのか？」

「校則違反だから。」

みんな普通に持ってきているんだが・・・。

さすが猫かぶりだ。

自分にとって都合が悪くなることはしないんだろう。

「電話はかけられないが、光るし、音出るし、科学が発達してないらしいこの世界では証明には十分だろ？」
そういうと俺はアラームを1分後にセットして机に置く。
フロトとフォーゲルは頭の上に『？』を浮かべている。
そりゃあ そうなるだろう。見たことも無い電子機器だからな。

1分後、

音楽と共に、朝です！朝です！と告げる電子音が部屋に響いた。

フロトとフォーゲルは最初こそ驚いていたが今は目を見開いて携帯電話を見ている。

「信じてくれたか？」

おそろおそろ尋ねる。これで信じてくれなかったら・・・もう信じてもらう術は無い。

「信じざるを得ません。」

2人が声を揃えて頷く。

ちよつとした達成感が心の奥から込み上げてくる。
ついに俺は信じさせてやったぞ。

どうでもいい達成感はおいとして、

「フォーゲルさん。あの黒い生き物は何ですか？フロトはよく知らないらしいんですけど・・・。」

ここに来るまでにこの質問はフロトにもしている。
しかし、魔法のことはわかっているのに、謎の生物のことはわからないらしい。

「あの生物ですか・・・。」

結論から言つと、いまだによくわかっていません。

ある日、大陸の北部で大量に出現したという報告だけです。

彼らの嫌なところはですね。その力とその量にあるのですよ。

地を人の倍の速さで進み、表皮は硬くほとんど剣が通らないんです。破壊本能のままに動くため、人と違い容赦なく相手を殺します。

1体に対して3人の屈強な戦士で挑んでやっと互角でしょう。

更に数に限りがありません。何体仕留めようとも、次から次へと沸いてきます。

北方には少し前まで大陸最強と謳われた軍事国家が存在していたのですが滅ぼされてしまいました。要因は先ほどいった反則なまでの強さです。多数精鋭とでもいいでしょうか。

また彼らは種族ごとの特定の形を持たないため、

『形持たぬ者』とよばれております。」

そこまで言っつてふつとフォーグルは顔を曇らせる。

そして重く、低い声で続けた

「過去にも『形持たぬ者』と人の間で行われた戦争があったんですよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6614z/>

異世界への迷人

2011年12月24日08時47分発行